

共助マップ共創システムによる高齢住民の共助意識の啓発支援 ：石川県河北郡内灘町高齢者コミュニティ鶴親会における事例 Support to Enlighten Senior Citizens' Consciousness of Mutual Assistance by a Cooperative Map Co-Creation System: A case study of an Elderly Community "Kakushinkai" in Ishikawa Prefecture

田中 孝治[†], 尹 明睿[‡], 堀 雅洋[‡], 浜崎 優子[§], 殿山 範子[¶], 池田 満[†]
Koji Tanaka, Mingrui Yin, Masahiro Hori, Yuko Hamazaki, Noriko Tonoyama, Mitsuru Ikeda

[†]北陸先端科学技術大学院大学, [‡]関西大学, [§]仏教大学, [¶]金沢医科大学 (現 純真学園大学)

Japan Advanced Institute of Science and Technology, Kansai University, Bukkyo University,

Kanazawa Medical University

kjtanaka@jaist.ac.jp

Abstract

In Japan where the society is becoming super aging, senior citizens are required to play both roles of support-sending and support-receiving. In Japan that is entering a super aging society, senior citizens are required to play both roles of support-sending and support-receiving. In this study, we develop a cooperative map co-creation system for senior citizens. The system is highly compatible with the current activities of mutual assistance in an elderly community. We aim to support to enlighten senior citizens' consciousness of mutual assistance by introducing and conducting the system in the elderly community. In this paper, we will examine what kinds of mutual assistance consciousness are clarified by change the medium of map from paper to electronic one.

Keywords — Senior Citizen, Mutual Assistance, Cooperative Map

1. はじめに

超高齢化社会を迎える日本において、高齢者が安心して定住地で生活できる継続的な仕組み作りが求められており[1]、安全・安心なまちづくりには共助意識の啓発と醸成が不可欠である[2]。そのため高齢住民は、サポート受容者であると同時に、サポート提供者としての役割を担うことを求められる。そのため、共助コミュニティがその役割を担うためには、高齢者一人一人が地域に開かれた共助活動を意識する必要がある。石川県内灘町の高齢者コミュニティ(鶴親会)では、週1回、公民館で健康維持・住民交流を目的とした体操を行っている。鶴親会では、体操の休憩時間を用いて、毎月1回、住民同士が見守りを行うために、各世帯の居住人数に応じて地図上の世帯を色分けする共助マップ作りをペンと紙の地図を用いて行ってきた。

本研究では、現行の活動と親和性の高い高齢者共助マップ共創システム(共創システム)[3]を開発し、鶴親会に導入・運用することで、高齢者の共助意識の啓発支援を目指している。本稿では、現行の紙地図(共助

マップ)から電子機器(共創システム)への媒体の変化が、参加者のどのような共助意識を明確化したのかについて検討を加える。

2. 鶴親会のコミュニティ活動

鶴親会は草の根的に生まれた高齢者コミュニティであり、コミュニティ参加者自身らで運営している。鶴親会のコミュニティ活動は、上述の通り、主に、体操活動やお楽しみ会といった健康維持活動、および、地域高齢住民の見守りや共助マップづくりといった地域共助活動の二つから構成されている。健康維持活動では、意識は自己内もしくはコミュニティ内に向けられる(自分たちに閉じている)(図1)。一方、地域共助活動では、意識はコミュニティ外に向けられる(地域に開かれる)(図1)。この意識の向きの違いは意識のし易さにも影響しており、コミュニティメンバーが必ずしも地域共助活動に意識を向けている訳ではない。Levasseurら[4]は、先行研究のレビューに基づいて、高齢者の社会活動を五つに分類しており、その中で、レクリエーション活動などの共通の目的のために他者と共同する活動、と、サポート提供やボランティア活動などの個人や集団を助ける活動を区分している。この境界には、サポー

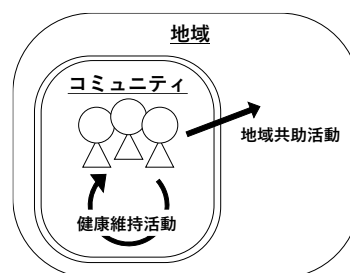


図1 コミュニティにおける健康維持活動と地域共助活動に対する意識の向き



(a) 共助マップ（紙媒体）

(b) 共助システム（電子媒体）

図2 地域共助活動

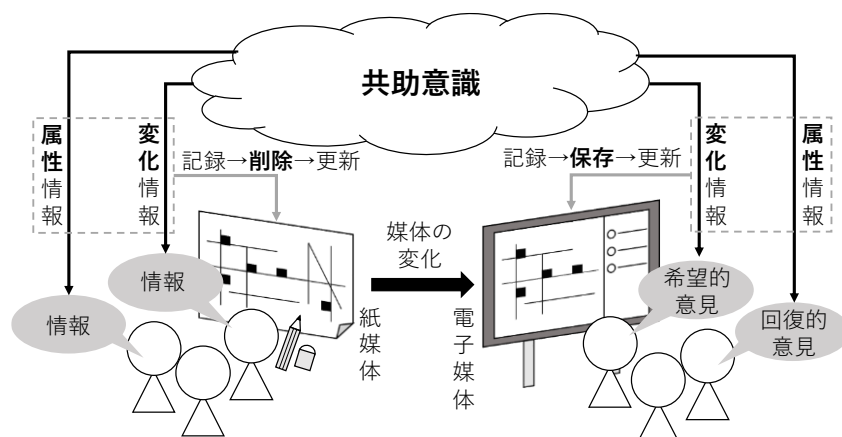


図3 媒体の変化に伴う意見の誘発

ト提供者としての役割を担う利他的な活動であるか否かの違いがある。高齢者のボランティア活動への参加や利他的な行動がウェルビーイングの向上に繋がることは、多くの研究において報告されている[5] [6] [7]ことから、鶴親会においても、参加者は健康維持活動へ意識を向ける（タスク指向）だけでなく、地域共助活動に意識を向けること（共助指向）が期待されている。

鶴親会の共創マップ作りでは、模造紙サイズに拡大した紙の住宅地図を可動式の黒板に貼り出し、各世帯の居住人数（「高齢者一人暮らし」「親族と同居」）に応じて、地図上の世帯をマーカーで色分けする（図2(a)）。このとき、色分けだけではなく、「ここのおばあちゃん、この前、施設に入所したよ」「ここのお年寄り日中一人暮らしだね」「ここはもう空き地じゃないよ」などの近隣の状況を確認し合い、必要に応じてペンをを用いて地図上に記述する活動を行っている。記述した情報に更新があれば、消しゴムや二重線を引いて削除し、新たな情報を加筆している。

3. 共助マップ共創システム

鶴親会に導入した共創システムは、Web サイトとして実装された地図アプリである。鶴親会では、公民館に設置された60インチのタッチパネル・ディスプレイを

用いて共創システムを利用している（図2(b)）。本システムでは、住宅地図上に表示された世帯区画をタップすることで、見守り区分（高齢者一人暮らし、高齢者二人暮らし、親族と同居（見守り必要）、見守りを必要としない、居住者なし）などの共助に必要な情報を入力することができ、入力された見守り区分は住宅地図上の世帯区画で色分けして表示される。また、住宅地図には拡大縮小機能が実装されており、世帯区画の個性と一覧性を担保している。入力した情報は日時と共に保存され、新たな情報に更新されたとしても、履歴としてシステムに保存されているため、日付を遡ってアクセス可能である。

なお、本システムは、Web アプリケーションであるが、セキュリティ管理によって、公民館での鶴親会参加者による使用のみに制限している。

4. 媒体の変化に伴う意見の誘発

本研究では、紙の地図から電子機器への媒体の変化が、住民からの現状の地図作りに近づけたいといった回復的意見とICTならこんなこともできそうといった希望的意見を誘発すると考えている（図3）。高齢者が人工物への怖がりを感じるということが知られている[8]が、一方で期待も感じていることが約1年間の運用（2016

年4月～)を通して確認できている。IT弱者の参加者(高齢者をIT弱者と一括りにするには注意が必要)にとっては、実現可能性に抑制されずに要望を挙げることができることから、「今まではできなかったけど、もしかしたら自分の思いが実現できるかもしれない」といった参加者の抱いていた共助への思いが現れることが期待できる。

本研究では、導入前ユーザーデザインレビューおよびシステムを運用してきた期間におけるヒアリング(現段階)とフォーカスグループ(予定)によって参加者から意見・要望を収集し、表出された意見がどのような共助の行為に結びついているかの調査を実施する(現時点ではヒアリングで表出された意見に解釈を加えた段階であり、今後、フォーカスグループによる調査を計画している)。

5. 調査

5.1. 意見収集

これまでのヒアリングによって、文字の大きさ、入力位置の低さ、文字削除ボタンの認識のしにくさといったユーザビリティ改善に関する意見、会員区別、性別、道路・公園への情報入力といったシステム改善に関する意見、退会者、死別、施設への入居といった共助意識に関する意見、ツバメの巣の調査への利用、公民館利用の活性化といったコミュニティ活動に関する意見が収集された。

共助の行為の際には、サポート受容者の「属性」と「変化」の情報が必要である。属性の情報とは、性別や会員区別といった時間経過が共助に関与しない情報である。変化の情報とは、死別、施設への入居といった時間経過が共助に関与する情報である。変化の情報は、サポート受容者にいつ何が起こったのかという経験に関する情報ともいえ、「配偶者が施設に入居して間もないから、今は、寂しい状態であろう」といった経験(変化)に起因したサポート受容者の状態を推測することに役立てることができる。

紙媒体利用時には、属性に関する情報は明示化されていたが、死別の情報といった変化の情報は、すべてを一枚の紙地図に表現しようとするとうんざりになってしまっている情報の一覧性が損なわれるため、地図上には表現せず住民の記憶に依存していた。電子媒体を利用することによって、属性の情報に加えて、変化の情報の提示が可能になり、参加者からコミュニティの変化に対する意見が表出された。コミュニティの変化を共助に反

映することで、サポート受容者の気持ちに寄り添った共助が可能になる。サポート受容者に対する変化の情報が共助に必要な情報として明示的に認識されることによって共助意識を高める一助になることが期待できる。

5.2. 表出された意見の解釈

5.2.1. 変化の情報

配偶者との死別の情報については、死別による残された人の思い(メンタルの状態、孤独感、生活上の不都合)を汲み取った支援を行うための意見と解釈することができる。高齢者の死別については、悲嘆、社会的引きこもり、環境や家族形態の変化への注意が必要である[9]。その中で、悲嘆については、悲嘆の長期継続、命日など個人を思い出す出来事による悲嘆の一時的再燃への配慮が必要である[10]。そのため、残された人の思いを汲み取るためには、いつ(時期)の情報が重要であり、配偶者との死別の情報は、共創システムにおいて、変化の情報として扱われることが期待できる。このとき、コミュニティ(鶴親会)との繋がりが保たれているため、変化の情報としての利用とインタラクションを通じて、思いを汲み取った共助行為が可能である。

また、退会者については、コミュニティ(鶴親会)との繋がりが希薄になる。年齢を重ねるほどサポート提供能力が低下することから、ある時点で受領者への役割転換が起こる[11]ことは、コミュニティ参加者の誰もが予測可能である。退会者の情報については、「サポート提供者(共助者)としての役割を果たすことができない旧参加者からは、サポート提供を求めずに、支援を継続したい」といったコミュニティに閉じない(地域に開かれた)共助意識の表れと解釈することができる。

5.2.2. 属性の情報

男女の区別については、例えば、「力が必要なサポートだから男性のAさんに頼もう」といったサポート提供者視点に立った共助意識や「サポート受容者Bさんは女性だから女性のCさんに頼もう」といったサポート受容者視点に立った共助意識の現れと解釈することができる。サポートは、交換される資源内容により、大きくは、情緒的サポートと手段的サポートの二つに区分される[12]。情緒的サポートとは、共感、安心、行為、尊敬などを示す行為であり、手段的サポートとは、サービスや実体的な援助を提供する行為である[12]。こうしたサポートの性質に合わせて、誰に(助けられる対象)に、誰が(助ける主体)が、何をするのか(共助の行為)を考えることで、適材適所を考慮した柔軟な共助

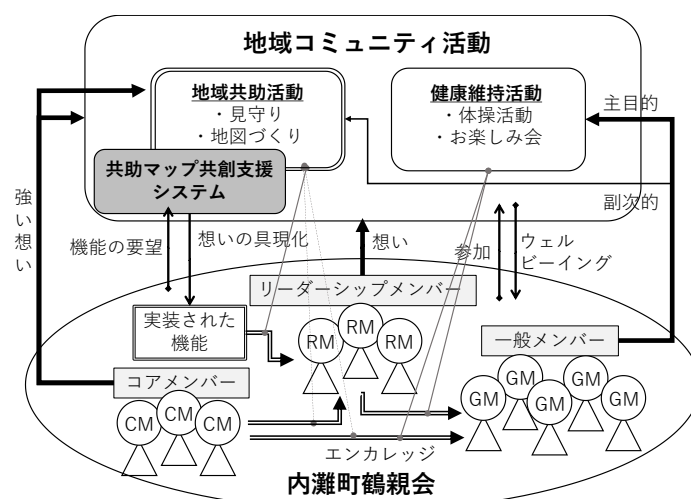


図4 地域コミュニティ活動と共助意識の啓発についての仮説モデル

が可能になる。また、会員区別については、「会員でない高齢者住民の見守りができる」といったコミュニティに閉じない地域に開かれた共助意識の表れと解釈することができる。

5. おわりに

本稿では、ヒアリングで表出された意見に解釈を加えた。コミュニティ参加者の意見の背後にある共助へ想いと筆者らの解釈には、幾分かの齟齬があることが想定できる。健康維持活動に対してのみに意識を向けている参加者は、地域共助活動に対する意識は低く、変化の情報として扱う方が好ましい情報を属性の情報として扱ってしまう恐れがある。参加者の意識を健康維持活動だけでなく地域共助活動にも向くようになることを促す環境づくりを支援することが今後の課題である。

高齢者による地域共助活動のための地図づくりでは、地域住民の主体的な参加と、地図づくりの意義の共有・合意が必要である[13]。地域共助活動における地図づくりは、完成度の高い（情報の網羅性の高い）地図づくりが目的ではなく、地図づくりを介してコミュニティ参加者の共助意識が啓発されることを目的とした活動であることが望まれる。そのため、鶴親会における共創システムのユーザ評価[14]と同時に、共創システムを介した共助意識の形成プロセスについて検討していくことが必要である。

筆者らは、共助意識形成プロセスの検討にフォーカスグループによる調査を計画している。調査を実施するに当たりコミュニティのメンバーを三つに区分する。地域共助活動の運営メンバーである共助指向のコアメ

ンバー、健康維持活動の運営メンバーであるタスク指向のリーダーシップメンバー、健康維持活動のみの参加メンバーであるタスク指向の一般メンバーである。筆者らは、コアメンバーが他のメンバーの共助意識を啓発する環境として、共創システムが利用されていることを想定している（図4）。生体の認知プロセスは常に外的世界と相互作用している[15]。コアメンバーが持つ地域共助活動に対する強い思いが、共創システムの機能実装として具現化され、共創システムを介して、他のメンバーの共助意識の形成が促されるプロセスを捉えることが今後の課題である。

参考文献

- [1] 岩原 昭彦・内海 みよ子・水主 千鶴子・上松 右二・有田 幹雄 (2010) “大学生による介入が高齢者の生きがいの向上に及ぼす効果”, 人間環境学研究, Vol. 8, No. 1, pp. 89-95.
- [2] 西野 達也・桑木 真嗣 (2009) “高齢者通所施設利用者の生活からみたある地縁型地域における地域住民らによる共助のみられる共在の場に関する事例考察”, 日本建築学会計画系論文集, Vol. 74, No. 642, pp. 1707-1715.
- [3] 井手 優太・田中 孝治・堀 雅洋・浜崎 優子・殿山 範子・池田 満 (2016) “高齢者共助マップ共創システムのユーザーデザインレビューの分析”, 第41回教育システム情報学会全国大会講演論文集, pp. 321-322.
- [4] Levasseur, M., Richard, L., Gauvin, L., & Raymond, É. (2010) “Inventory and analysis of definitions of social participation found in the aging literature: Proposed taxonomy of social activities”, Social science & medicine, Vol. 71, No. 12, pp. 2141-2149.
- [5] Okamoto, K., & Tanaka, Y. (2004) “Subjective usefulness and 6-year mortality risks among elderly persons in Japan”, The Journals of Gerontology Series B: Psychological Sciences and Social Sciences, Vol. 59, No. 5, pp. 246-249.
- [6] Gruenewald, T. L., Karlamangla, A. S., Greendale, G.

- A., Singer, B. H., & Seeman, T. E. (2007) "Feelings of usefulness to others, disability, and mortality in older adults: The MacArthur study of successful aging", *The Journals of Gerontology Series B: Psychological Sciences and Social Sciences*, Vol. 62, No. 1, pp. 28-37.
- [7] An, J. S., & Cooney, T. M. (2006) "Psychological well-being in mid to late life: The role of generativity development and parent-child relationships across the lifespan", *International Journal of Behavioral Development*, Vol. 30, No. 5, pp. 410-421.
- [8] 田中 伸之輔・原田 悦子 (2017) "高齢者が人工物利用時に示す「怖がり」: 実験室およびコミュニティ活動場面における人-人工物間相互作用分析", *ヒューマンインタフェース学会論文誌*, Vol. 19, No. 1, pp. 1-12.
- [9] 平井 啓 (2016a) "死別", 佐藤 眞一・権藤 泰之 (編) よくわかる高齢者心理学第 16 章, 社会 4 死と死別, ミネルヴァ書房, 京都, pp.160-161.
- [10] 平井 啓 (2016b) "悲嘆と悲嘆からの回復", 佐藤 眞一・権藤 泰之 (編) よくわかる高齢者心理学第 16 章, 社会 4 死と死別, ミネルヴァ書房, 京都, pp. 162-163.
- [11] Morgan, D. L., Schuster, T. L., & Butler, E. W. (1991) "Role reversals in the exchange of social support", *Journal of Gerontology*, Vol. 46, No. 5, S278-S287.
- [12] 小林 江里香 (2008) "高齢期の社会関係", 権藤 恭之 (編) 高齢者心理学第 9 章. 朝倉書店 東京, pp. 151-169.
- [13] 佐藤 美由紀・山田 薫・吉田 明弘・吉田 郭子・小野寺 さやか・河端 麻実・藤田 喜枝子・斎藤 恭平・芳賀 博 (2009) "住民主体の「高齢者ささえあい地図」づくりをととした地域のエンパワメントとその支援", *保健師ジャーナル*, Vol. 65, No. 3, pp. 224-232.
- [14] 久山 勝生・南 和輝・井手 優太・尹 明睿・田中 孝治・堀 雅洋・池田 満 (2016) "高齢者の健康自立を支えるコミュニティ形成のための共助マップシステムのユーザ評価", 2016 冬季HCD研究発表会予稿集, pp. 24-27.
- [15] 原田 悦子 (2017, June) "認知研究のアイデンティティ: 認知心理学と認知科学の交流にむけて" 日本認知心理学会第 15 回大会ワークショップ, 東京